

動詞 *hand*, *write*, *wave* における与格交替

— 使役移動と使役所有 —

登 田 龍 彦

The Dative Alternation of the Verbs *hand*, *write*, and *wave*

Caused Motion and Caused Possession

Tatsuhiko TODA

(Received October 1, 2008)

1. はじめに

小論では, 下記の (1)–(5) に示されるような与格交替 (dative alternation) における使役移動 (caused motion) と使役所有 (caused possession) の意味が, 構文の意味に由来するのかあるいは動詞の意味に由来するのかを議論する。¹

- (1) a. John gave an apple to Susan.
b. John gave Susan an apple.
- (2) a. John threw the ball to Susan.
b. John threw Susan the ball.
- (3) a. John handed a note to Susan.
b. John handed Susan a note.
- (4) a. He wrote a note to his lawyer.
b. He wrote his lawyer a note.
- (5) a. The nurses came out to wave goodbye to Granddad.
b. The nurses came out to wave Granddad goodbye.

(1)–(5) の (a) の与格構文 (the dative construction) と (b) の二重目的語構文 (the double object construction) の構造形が, 文の意味の相違を示す場合と示さない場合がある。例えば, 動詞 *give* の場合の (1a) と (1b) には「スーザンがジョンからリンゴを受け取った」という意味が同様に存在する。これに対して, 動詞 *throw* の場合では (2a) と (2b) の意味が異なると言われている (Rappaport Hovav and Levin 2008)。つまり, (2a) には「ジョンがボールをスーザンの方に投げた」というボールの動き (すなわち使役移動) の意味と「スーザンがボールを受け取った」というボールの所有 (使役所有) の意味が二つあり曖昧であるのに対して, (2b) には使役所有の意味しか存在しない。

使役移動と使役所有の相違は, 概略以下のように二つの異なる論的述語 GO と HAVE をそれぞれ含む意味論的表示として表現できる (Pinker 1989, Rappaport Hovav and Levin 2008)。

- (6) a. 使役移動: NP_0 CAUSES NP_2 TO GO TO NP_1
b. 使役所有: NP_0 CAUSES NP_1 TO HAVE NP_2

(6a) は, 主語名詞句 NP_0 の指示物が直接目的語名詞句 NP_2 の指示物を前置詞の目的語名詞句 NP_1 の指示物の所に移動させるということを示している。(6b) は, 主語名詞句 NP_0 の指示物が間接目的語名詞句 NP_1 の指示物に直接目的語名詞句 NP_2 の指示物を所有させるということを示している。このような (6a) と (6b) に見られる意味は, 基本的にそれぞれ与格構文と二重目的語構文によって表現されるものであるとするのが通説である。これ

は構文的意味の存在を認めている立場である。従って、(1)と(2)における意味の相違は、構文的意味の他に生起する動詞の特性と大きく関わっていることを示している。

小論では、(3)–(5)のような他の動詞の場合を観察することにより、文の意味決定に係わる構文的意味と動詞の意味の相互作用について考察する。議論の中で特に畠山ほか(2008)の動詞 *hand* についての記述と『ジーニアス英和辞典(第4版)』の動詞 *write* についての記述について吟味すると同時に、動詞 *wave* のような非言語的伝達動詞の用法を観察する。(3)では、ジョンがスーザンに手紙を(手)渡したかどうか、(4)では、彼が弁護士に手紙を書いて投函したのかどうか、(5)では、看護師たちが手を振って別れの挨拶をしたことを祖父が気づいたのかが問題となる。また同時に、小論では、Rappaport Hovav and Levin(2008)の「動詞の意味が項具現(argument realization)の形を決定する際に重要な役割を果たしている」という提案についての妥当性を吟味する。

議論の構成は以下の通りである。第2節では、動詞 *hand*, *write*, *wave* の生起する問題の構文を考察する。第3節では、非言語的伝達動詞の用法について議論する。第4節では、動詞指向と構文指向の考え方について、項性と言語習得の視点から議論する。第3節と第4節の議論は、登田(2006, 2007b)および Toda (to appear) の考察の一部を敷衍したものである。第5節で、今までの議論を要約すると同時に、残された問題について付言する。

2. *hand*, *write*, *wave*

本節では、授与動詞 *give* と同類とされる *hand*, 伝達動詞 *write*, 非言語的伝達動詞 *wave* を取り上げ、先行研究の妥当性を吟味する。

2.1 *hand*

畠山ほか(2008)は、日本語には英語の第3文型(与格構文)と第4文型(二重目的語構文)のような明示的な区別は無いが、日本語(7a)は、(7b)が容認されないことから「メアリーが手紙を受け取った」ことを含意するので、(7a)の英訳は所有を含意する第4文型の(8b)が適切であると主張している。

- (7) a. ジョンはメアリーに手紙を手渡した。
 b. *ジョンはメアリーに手紙を手渡したが、メアリーはまだ受け取っていなかった。
- (8) a. John handed a letter to Mary.
 b. John handed Mary a letter.

しかし、与格構文に動詞 *hand* が生起する場合、所有関係を示す事実がある。私のインフォーマントによれば、² 与格構文も二重目的語構文の場合と同様に、授受関係を打ち消す文を後続させることはできない((9a), (9b))。

- (9) a. *John handed a note to Susan, but she didn't receive it.
 b. *John handed Susan a note, but she didn't receive it.

従って、(7a)の英訳として(8a)も適切と言える。動詞 *hand* の場合、所有関係を含意するかどうかは、構文型のみならず生起する動詞にも依存することを示している。

2.2 *write*

『ジーニアス英和辞典(第4版)』(s. v. *Write* 3a)は、動詞 *write* が与格構文と二重目的語構文に生起する場合、「書き送る」という意味を表すと記述して、両構文を等号で結び同じ訳(10b)を与えている。

- (10) a. He wrote a note to his lawyer. = He wrote his lawyer a note.
 b. 彼は弁護士に短い手紙を書いて出した。

しかし、登田(2007b)および Toda (to appear) が指摘しているように、両構文に生起する *write* には「書き送

る」という意味はまだ語彙化されていない。通常、手紙を書けば投函をするのが当然であることから、「(書き)送る」ということは含意されるが、(11)に示されているようにその含意は却下される。

- (11) a. He wrote a note to his lawyer, but he didn't mail it.
 b. He wrote his lawyer a note, but he didn't mail it. (登田 2007b, Toda, to appear)

同様の事実は、Rappaport Hovav and Levin (2008: 148) が例 (12) を挙げて指摘している。

- (12) a. I wrote a letter to Blair, but I tore it up before I sent it.
 b. I wrote Blair a letter, but I tore it up before I sent it.

(12) は、ブレア宛に書かれた手紙が送られる前に破られたことを示している。動詞 write に「書き送る」という意味が語彙化していれば、(11) と (12) の文は矛盾文として容認されないことになる。『ジーニアス英和辞典(第4版)』(s. v. Write 3a) の記述は、現時点ではまだ不適切であると言える。

以上の考察から、write がまだ使役移動の意味を語彙化していないことと write の生起する両構文も使役移動の意味を表さないことが明らかになった。

2.3 wave

登田 (2006) は、表面上二重目的語構文と同語順の構文に生起する hug, kiss, wave, nod, bow などの非言語的伝達動詞の分布の分析を行っている。そこで指摘された有性名詞句目的語の与格交替を許すのは wave だけであるという事実を、小論では取り上げ再考する。問題の事実は、次の (13) - (17) の分布に見られる。

- (13) a. The nurses came out to wave goodbye to Granddad.
 b. The nurses came out to wave Granddad goodbye.
 (14) a. * I hugged goodbye to him.
 b. I hugged him goodbye.
 (15) a. * Kiss goodnight to Daddy.
 b. Kiss Daddy goodnight.
 (16) a. They nodded goodnight to the security man.
 b. ???They nodded the security man goodnight.
 (17) a. He bowed goodbye to me.
 b. ???He bowed me goodbye. (以上 登田 2006)
 c. The gentlemen of the province were collected from far and near. The hour of six struck; the soup and fish were on the table. The Lord Lieutenant walked in amidst deafening cheers, looking as much the fine gentleman as ever, and smiling and bowing his thanks to his townsmen (下線筆者). (*The Times*, 14 March, 2003)

(13) は、動詞 wave が与格構文型と二重目的語構文型の両方に生起可能であることを示している。(14) と (15) では、動詞 hug と kiss が与格構文型に生起しないことを示している。(16) と (17) では、動詞 nod と bow が二重目的語構文型に生起する可能性が低いことを示している。

ここで急いで付言しておくが、動詞 kiss は抽象的な直接目的語を取る場合は与格構文型にも生起可能である。

- (18) a. She kissed goodbye to her career.
 b. She kissed her career goodbye. (登田 2006)

(18) における kiss goodbye の(不)連続体は、'lose' 等を意味するイディオムとして解釈できる。

問題の wave にも kiss と同様に抽象名詞句を取る用法がある。先ず与格構文型の例として (19) を挙げることができる(下線筆者)。

- (19) Agents themselves have, of course, been known to overstep the mark in their eagerness to get business. Some even admit to indulging in vaguely dangerous behaviour. Marc von Grundherr, the residential lettings director for London at Benham & Reeves, admits he got a bit carried away once when trying to let his own place. "I was keen to get my flat rented. When this woman came to sign the deal, she insisted on a get-out clause of just one week." Most contracts allow you to get out after six months, not a single week. Yet even von Grundherr—a property professional who knows better—couldn't quite wave goodbye to the deal. "She had the cash in her hand, and wanted to sign there and then. I think I was just desperate to get the flat away." (*The Sunday Times*, March 2, 2008)

(19) の下線部 wave goodbye to the deal は取引を止めるという意味であり、動詞 *kiss* の場合と同様に *wave goodbye to* はイディオム表現と言えるかもしれない。

次に、二重目的語構文型の例として (20) と (21) を挙げる事ができる (下線筆者)。

- (20) Wave The Bubble goodbye
The Party's Over For The Highest Fliers. Here's How To Find Life After Market Death. Think Value Investing. By Jane Bryant Quinn | NEWSWEEK From the magazine issue dated Apr 24, 2000.
(<http://www.newsweek.com/id/83818/page/1>)
- (21) Wave Another Day Goodbye
Ronderlin \$31.49
(http://www.target.com/gp/detail.html/60...v_XSNG1060)

(20) と (21) は、Web ページに掲載されたニューズウィーク誌の記事タイトルと楽曲名であり、(一応) 容認できる表現であると思われる。

以上、同じ非言語的伝達動詞に属すると思われる動詞間で、与格交替の振る舞いが異なることを観察した。

3. The Quasi Double-Object Construction

本節では、表層上与格構文型と二重目的語構文型の語順を取る非言語的伝達動詞 *wave* に焦点を当て、その特性について考察する。

3.1 The Double Object Construction

非言語的伝達動詞が二重目的語構文型を取る場合の基本的な特性は、登田 (2006) で提案した (22) の形式で記述できる。

- (22) 統語論: NP₁ V NP₂ NP₃
意味論: Y₂ HAVE Z₃
手段: [VERBAL SUBEVENT: X₁ ACT Y₂] (登田 2006: 179)

(22) は、統語論的に「名詞句₁ + 動詞 + 名詞句₂ + 名詞句₃」の配列型を示す場合、主語₁が(間接)目的語₂に対して当該の動詞の表す行為をすることにより、(間接)目的語₂が(直接)目的語₃を所有するという意味を表現している。既述した正規の二重目的語構文の使役所有 (6b) の場合と異なるのは、動詞が「手段」としての非言語的行為を表している点である。

- (6) a. 使役移動: NP₀ CAUSES NP₂ TO GO TO NP₁
b. 使役所有: NP₀ CAUSES NP₁ TO HAVE NP₂

例えば、(13b) を具体例にして説明すると、看護師が(出てきて)手を振ることにより祖父が別れの挨拶を受

け取ったすなわち看護師が（出てきて）手を振って別れの挨拶を祖父にし、祖父がそれに気づいたということになる。

- (13) a. The nurses came out to wave goodbye to Granddad.
b. The nurses came out to wave Granddad goodbye.

それでは、(13a) の与格構文の場合はどうか。使役移動の読みと使役所有の読みのどちらが得られるのか考察しなければならない。問題文の後に *but he didn't notice it* 「しかし祖父は気づかなかった」を続けてみると、私の二人のアメリカ人のインフォーマントは、与格構文型と二重目的語構文型の場合で異なる容認性の判断を示した。

- (23) a. The nurses came out to wave goodbye to Granddad, but he didn't notice it.
b. ??/*The nurses came out to wave Granddad goodbye, but he didn't notice it.
c. She waved to him but he was not looking in her direction.
(*King Solomon's carpet*. Vine, Barbara. London: Penguin Group (1992) (BNC))

(23a-b) において、インフォーマントは、与格構文に逆接文が後続する場合は容認するのに対して、二重目的語構文の場合は奇妙である (odd) と判断した。この観察からすれば、与格構文型の場合は挨拶行為が完全に成立しない使役移動の意味を表すのに対して、二重目的語構文型の場合は挨拶行為が成立し使役所有の意味を表していることになる。この (23a-b) の事実は、(22) の記述を支持する証拠である。さらに、コーパス資料 BNC の中に (23c) の例も見られた。「彼女は手を彼の方へ振っ（て挨拶をし）たが、彼は彼女の方を見ていなかった」という内容である。(23c) は *goodbye* が省略されているが与格構文型の一種であり、使役移動の読みを表している。

この事実を踏まえて、与格構文型の場合の基本的特性を (22) の記述方法に従って表すと (24) になる。

- (24) 統語論: NP₁ V NP₃ to NP₂
意味論: Z₃ GO to Y₂
手段: [VERBAL SUBEVENT: X₁ ACT Y₂]

問題の両構文に生起可能な *wave* については、各構文の伝える意味が使役移動あるいは使役所有というように異なっていることが明らかになった。³

3.2 The Quasi Double-Object Construction と The Quasi Dative Construction

本節では、一見すると二重目的語構文型のように思えるが、実は異なる構文型の (25) について考察する。

- (25) a. John waved his hands goodbye.
b. John nodded his head yes.
c. John bowed his head thanks.
d. John shook his head no.

(25) における動詞 *wave*, *nod*, *bow*, *shake* などの直後の名詞句 *his hands* と *his head* は、動詞の本質の意味から自然に派生する動作対象物で、動詞との結合的意味として直後の名詞句 *goodbye*, *yes*, *thanks*, *no* の意味内容を予測可能にしている。例えば、*Longman Dictionary of Contemporary English*⁴ での各動詞の第一番目の語義説明は、以下のようにになっている（下線筆者）。

- (26) a. **wave**: to raise your arm and move your hand from side to side in order to make someone notice you.
b. **nod**: to move your head up and down, especially in order to show agreement or understanding.
c. **bow**: to bend the top part of your body forward in order to show respect for someone important,

or as a way of thanking an audience.

- d. **shake**: to move suddenly from side to side or up and down, usually with a lot of force, or to make something or someone do this.

(26a) の wave では手を動かすこと, (26b) では頭を動かして同意を示すこと, (26c) では (必然的に頭が含まれる) 体の上部を動かして感謝の気持ちを示すと記述されている。(26d) では動きの対象物は明記されていないが, 別見出しで慣用句 shake your head としての記述がある。

議論を動詞 wave に戻して考えてみると, (25a) の直接目的語 his hands は, 動詞の意味の一部と言える要素であるため, 省略可能である。換言すると, 目的語が一般的な語句で自明な場合や場面? 文脈上述べる必要の無い情報である場合には省略される。例えば, John ate. の場合, 通常省略されているのは食事 (meal) である。

最初に見た動詞 give は, 主語以外に二つの目的語が必要であるのに対して, 動詞 wave は伝達される情報である goodbye と情報の受け手も省略可能である。

- (27) a. *John gave (to) Susan.
 b. *John gave an apple.
 (28) a. The nurses came out to wave (Granddad) goodbye.
 b. She waved goodbye (to him) through the car window.
 c. Wave (goodbye) to Grandma, Charlie. (登田 2007a: 30)
 d. People were looking down, waving from their window, I waved back. (市川 1995)

(28) では, wave の意味は「手を振る」ということになる。(28d) の市川訳は「人々は窓から見下ろしながら手を振っていたので私も手を振ってそれに答えた」となっている。

興味深いことに, wave に hand のような意味的に含意する名詞句が生起する場合, (to) Granddad のような情報の受け手と goodbye のような情報は共起できない (cf. (25a)).

- (29) a. John waved his hand to Granddad.
 b. *John waved his hand to Granddad goodbye.
 c. *John waved his hand goodbye to Granddad.
 d. *John waved his hand Granddad goodbye. (登田 2006: 178)

以上の考察から, (30a) (= (29a)) と (30b) (= (25a)) は与格構文型と二重目的語構文型に表層上似ていてそれぞれ (24) と (22) の形式を満足している様に見えるが, 使役移動と使役所有の意味を表さない。小論では, (30a) と (30b) を, それぞれ疑似与格構文 (the quasi dative construction) と疑似二重目的語構文 (the quasi double-object construction) と呼ぶことにする。

- (30) a. John waved his hand to Granddad.
 b. John waved his hands goodbye.

(30a) では, wave の直接目的語である his hands と与格目的語の祖父は生起しているが, 祖父への伝達情報は表層には生起しない。が, 別れの挨拶等は wave his hands の結合的意味から含意され予測できる。これに対して, (30b) では, his hands と伝達情報 goodbye は生起しているが, 情報の受信者が生起していない。この場合, 文脈・場面抜きでは問題の受け手を予測することはできない。動詞 wave の目的語として (his) hands が生起する構文型 (30) は, 手を振るという行為が特別な情報量を持つ場面を除けば, 構文自体の存在理由が弱い様に思える。実例では, hand が省略された例がほとんどである。

4. 構文の意味と動詞の意味

4.1 動詞指向と構文指向

これまでの議論から明白であるように、小論の議論は、Rappaport Hovav and Levin (2008) の主張「動詞自体の意味が項具現の形を決定する際に重要な役割を果たす」と軌を一にするものである。これに対して、与格構文型と二重目的語構文型が表す意味は、それぞれ使役移動と使役所有であるというのは構文指向の主張である。確かに (31a) から窺えるように、構文にはそれぞれ独自の意味が存在していると言える、

- (31) a. Frank sneezed the tissue off the table. (Goldberg 1995: 152)
 b. John put the book on(to) the desk.

(31a) の sneeze は「くしゃみをする」という自動詞で、後に目的語名詞句と方向を示す斜格を取る必要はない。(31b) では、動詞 put は「置く」という意味からも明らかなように、目的語と方向・場所の前置詞句を取り、「本を机の上に移動する」という使役移動の意味を表す。動詞 sneeze がこの種の構文型に生起するのは、このような使役移動の読み（すなわち、フランクはくしゃみをしてティッシュをテーブルから飛ばしてしまった）と整合性を持たせることができるからだと思われる。

問題は、(31a) の the tissue と off the table は動詞 sneeze の項であるかどうかということである。結論的に言えば、それは構文の項と言える。Rappaport Hovav and Levin (2008) の言う項具現の対象が動詞の項であって構文の項ではないという考え方に立てば、(31a) は動詞指向の主張の反例とはならないであろう。彼らはこの点に付いては明言していない。

小論で問題にしてきた (32a-b) における goodbye と (to) Granddad の項性については、(33) のような他の非言語的伝達動詞の分布も踏まえて考える必要がある。

- (32) a. The nurses waved goodbye to Granddad.
 b. The nurses waved Granddad goodbye.
 (33) a. He was {kissed/(?)waved/(*)hugged} goodbye.
 b. *Goodbye was {kissed/waved/hugged} him. (登田 2006)

(33a) から窺えるように、情報受信者 He は受動文の主語になれるので項として考えても良いと思われる。これに対して (33b) は伝達情報 goodbye は受動文の主語になれないことを示し、動詞の項と考えることは難しいように思われる。登田 (2006) でも主張しているように、goodbye は構文の項と見なす方が良いように思われる。

4.2 言語習得過程および文理解における構文指向

構文指向の主張が妥当性を帯びてくる場面として、言語習得を挙げることができる。特に、語彙の意味を獲得する際に構文の持つ役割が重要になってくるという主張が、Goldberg (2006) と Goodman and Sethuraman (2006) 等によってなされている (Toda, to appear)。

ここでは、大人だけでなく子どもも構文を拠り所にして新奇な動詞の可能な意味を推論することを示す実験を二つ取り上げる。まず、Naigles et al (1987) は、2歳児を対象に二つの場面を示すと同時に一場面に対応する文を聞かせる。そうすると子どもたちは、各場面と新奇な動詞 gorp の文を正しく組み合わせることができたと報告している (Goodman and Sethuraman 2006: 267)。具体的な問題の場面とその対応文は、(34) と (35) の各々 (a) と (b) である。

- (34) a. アヒルがウサギを押し曲げている使役的場面
 b. 'Look! The duck is gorp^{ing} the bunny!'
 (35) a. アヒルとウサギがお互いに腕のしぐさをしている非使役的場面
 b. 'Look! The duck and the bunny are gorp^{ing}!'

第二の実験は、Ahrens (1995) の行った英語を話す大人に対してのものである (Goodman and Sethuraman 2006: 266; Goldberg 2006: 116)。(36) の moop がどのような意味かを聞いたところ、60%が 'give' であると答えたと報告している。

(36) I mooped him something.

これらの実験から、自動詞構文、他動詞構文および二重目的語構文といった構文型にはある特定の意味が存在することがわかる。因に、問題の二重目的語構文は、移送 (transfer) の意味を表すと Goldberg (2006) は主張している。⁴

5. 結 語

小論の議論で明らかになったのは、以下の点である。

- (37) a. 与格構文型と二重目的語構文型はそれぞれ使役移動と使役所有の意味を表す基本形ではあるが、生起する動詞の意味特性によっても二種類の意味が影響を受ける場合がある。
 b. 動詞 hand は、問題の両構文において使役所有の意味を表すのに対して、write は、使役移動の意味を表さない。非言語的伝達動詞 wave は、両構文の基本的意味を表す。⁵
 c. 新奇な動詞と直面する言語習得や文理解の場面においては、構文の持つ意味が重要な役割を果たしていると言える。

Rappaport Hovav and Levin (2008: 147) の主張するように、動詞の意味すなわち語彙化された意味が項具現に重要な役割を果たしているとは言える。が、構文の意味が語用論の意味から次第に語彙の意味に変化するシステムもあることは否めない。例えば、動詞 put は、以前 'push' の意味を表し場所語句を随意的要素として従えていたが、使役移動の構文に生起することから 'place' の意味を獲得し、その結果現代英語では場所語句は義務的要素になっている (登田 2007b, Toda, to appear)。更に、文に生起する項と付加詞の分布は、統語論的・意味論的・語用論的・談話構造上の様々な要因が係わっていることを認識しておく必要があると思われる。⁶

注

¹ (1)–(5) の用例の中で、(5a) は *Longman Dictionary of Contemporary English 4* (s. v. Wave 1) から、その他はすべて辞書と文献からの借用である。引用に際して、綴り字等を若干修正している (以下同様)。

なお、動詞 give, throw, hand, write は、Rappaport Hovav and Levin (2008: 134) が要約している一般的な動詞分類ではそれぞれ (ia), (iib), (ia), (ic) に属するが、wave はどこにも属さない。

- (i) 使役所有の意味のみを持つ与格動詞
 a. 授与行為内在動詞: give, hand, lend, loan, pass, rent, sell, ...
 b. 未来所有動詞: allocate, allow, bequeath, grant, offer, owe, promise, ...
 c. 伝達動詞: tell, show, ask, teach, read, write, quote, cite, ...
 (ii) 使役移動と使役所有の両方の意味を持つ与格動詞
 a. 発送動詞: forward, mail, send, ship, ...
 b. 弾道運動瞬時使役動詞: fling, flip, kick, lob, slap, shoot, throw, toss, ...
 c. 直示方向付随運動使役動詞: bring, take
 d. 伝達道具動詞: e-mail, fax, radio, wire, telegraph, telephone, ...

小論では、wave を非言語的伝達動詞 (verbs of nonverbal communication) として議論を進める。非言語的伝達動詞の詳細については、Huddleston and Pullum (2002: 305) と登田 (2006) を参照。

² Lydbury Grammar Clinic の moderator である。

³ 他の非言語的伝達動詞の場合は、(14)–(17) で観察したように完全に問題の両構文に生起可能ではないため、構文の意味機能の検証は不可能である。

⁴ 天野 (2006) は、構文の意味が文における意味理解に果たす役割について、幾つかの日本語構文を取り上げて論証している。また、Pinker (2007: 56–76) は、使役移動や使役所有といった構文型の意味概念が心理的に実在している (psychologically real) ことを、与格交替を含む他の構文現象で例証している。

⁵ 動詞 wave 以外の非言語的伝達動詞の両構文への生起可能性については、個々の動詞の統語論的・意味論的・特性の

みならず英語圏におけるジェスチャーの文化的意味合いも大いに関与しているように思われる。

⁶ 詳細については登田 (2007a) を参照。

参考文献

- Ahrens, Kathleen V. 1995. *The mental representation of verbs*. Doctoral dissertation, University of California, San Diego.
- 天野みどり 2006. 「構文の意味－文における意味理解に果たすその役割－」『日本語学』5月号, 53-63.
- Goldberg, Adele E. 2006. *Constructions at work: The nature of generalization in language*. Oxford: Oxford University Press.
- Goodman, Judith C. and Nitya Sethuraman. 2006. Interactions in the development of constructions and the acquisition of word meanings. In *Constructions in acquisition*, ed. by Eve V. Clark and Barnbara F. Kelly, 263-281. Stanford, CA: CSLI Publications.
- 畠山雄二・本田謙介・田中江扶 2008. 「英語の二重目的語構文と所有者昇格構文－所有関係から見える構文間のつながり」『英語教育』8月号, 64-66.
- Huddleston Rodney and Geoffrey K. Pullum 2002. *The Cambridge grammar of the English language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Naigles, Letitia R., Kathy Hirsh-Pasek, Roberta M. Golinkoff, Lila Gleitman, and Henry Gleitman. 1987. From linguistic form to meaning: Evidence for syntactic bootstrapping in the two-year-old. Paper presented at the 12th annual Boston University child language conference. MA: Boston.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pinker, Steven. 2007. *The stuff of thought: Language as a window into human nature*. New York: Viking.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 2008. The English dative alternation: The case for verb sensitivity. *Journal of Linguistics* 44, 129-167.
- 登田龍彦 2006. 「I hugged him goodbye について: 非言語的伝達動詞と二重目的語構文」山田英二他編『ことばの絆』175-188. 東京: 開拓社.
- 登田龍彦 2007a. 「項と付加詞の出没－投射主義アプローチの検証－」『IVY』第40巻, 19-43.
- 登田龍彦 2007b. 「多義性と意味変化における構文の役割について」『熊本大学教育学部紀要, 人文科学』第56号, 219-228.
- Toda, Tatsuhiko. To appear. On the role of constructions in semantic change and polysemy. *Nagoya daigaku Eibun gaku soshu*. Tokyo: Otowashobo-tsurumishoten.
- 辞書・コーパス
- 市川繁治郎 (編) 1995. 『新編英和活用辞典』東京: 研究社.
- 小西友七 (編) 2006. 『ジーニアス英和辞典 (第四版)』東京: 大修館.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 2003[†]. London: Longman.
- BNC. British National Corpus Online.